

## 第2回大学魅力アップ有識者検討会議（議事概要）

日時 平成19年11月9日（金） 午後2時30分から4時30分まで

場所 新潟市中央区新光町 興和ビル 会議室

出席者 山岸会長、伊藤委員、大竹委員、親松委員、小林委員  
西井委員、船戸委員、

### 【会議の内容】

- 1 開会
- 2 課長あいさつ
- 3 議事
  - (1) 「基本的な認識」(別紙1のとおり)と魅力アップの取組の「柱」  
学生の満足度を高め、付加価値を高める(別紙2のとおり)
    - ・ 主体的な自己点検に基づく様々な取組の推進など  
高校との関係を強化する(別紙3のとおり)
    - ・ 高校生の進路選択に役立つ情報提供、教育面での協力など  
地域貢献を進め、地域からの評価を高める(各委員からの意見は特になし)
    - ・ 地域からの評価を高める取組など
  - (2) 中間的なとりまとめ(素案)について  
会議の目的(別紙4のとおり)  
現状認識(別紙5のとおり)  
その他(別紙6のとおり)
  - (3) 傍聴者との質疑応答(別紙7のとおり)
- 4 閉会

## 別紙1 基本的な認識

### 【伊藤委員】

共通認識としてもっておかなければいけないのは、4点の課題に関連して新潟県内における高校・大学を含めたときの問題・要素がどのようなところに存在しているのかということだ。それがおぼろげにでも見えていないと、一般論に終わってしまう気がしないでもない。本県の課題ということを整理しておくべきであると思う。

問題・要素が本県の抱える高校教育に起因しているのか、大学教育に起因しているのか、あるいは戻ってくるべき産業界に問題があるのか。学生にとって何が一番不満なのか、何が一番魅力に乏しいのかというところをある程度しっかりとらえていかなければいけない。それはこの会議が作られた目的でもあると思う。

問題点、根本的な原因は議論していかなければいけない。そのところで、以上のような認識に立って行わなければいけないと思う。

### 【小林委員】

課題としてやるべきことは出ている。それをまずどこからやるかというのは具体的にすればするほど個々の問題に限定されてくる。それを平均的なデータをとって平均点をとっても仕様がなない。

要はブランド力がない大学をどうするかという問題だ。県外に人材が出て行くのは結構だと思うが、その人材が戻ってくるほど新潟県に魅力があるところであるかどうかという点が一番だと思う。減っていくパイを奪い合うのではなく、県外から人材を集めることができる大学をどう作るかだと思う。

行政が助成金を出す一つの指標として県外からどれくらい人材を集めてくることのできたかというものが考えられる。県外の間人が新潟県にある大学に来たいと思った場合、地元の学生が振り向かないわけではない。県外からどれくらい集めてきたか。それを指標にして成果をもとにして県は助成をすればいいのではないか。

## 別紙2 学生の満足度を高め、付加価値を高める

### 【事務局】

石川県と熊本県の取組について説明。

### 【小林委員】

事務局への質問だが、例としてあげられた金沢工業大学や熊本学園大学が改革に取り組む際に、実際にいる職員や講師からの反発は多かったと思われる。それをどのようにして乗り越えたのかヒントのようなものはあるか。

### 【敬和学園大学白井】

金沢工業大学は新潟県と同じで、35%が県内に残り65%が県外に出る。平成4年の準備段階において、潰れるのは最初に自分のところだという危機意識をもって、徹底的に議論され、時間をかけてコンセンサスを得たということだ。特に大学の先生にとって他の大学で非常勤をすることはできないなど、いろいろあったと思うが、危機意識を共有したとしか言いようがないと事務局長は話していた。

### 【青陵大学古山】

経営側の考えを極力理解していただく努力を怠っていないということを常務理事の方が言っていた。常務理事、事務局長、事務局次長、総務部長、この4人がありとあらゆる先生方の委員会に出席し、学内の情報の集約、意識の共有をはかる努力を怠っていない。学内理事会の中に常務理事が参加することで、経営側の意思を伝えているということだった。

### 【小林委員】

改革をするときに表面の部分のいいとこ取りをして真似るだけではだめで、表面に出ない部分を地道にやっていかなければ本当の改革にはつながらないと思う。

### 【西井委員】

事務面の協力体制がないと、改革はできない。教員と生徒で自分の所属する大学の何が魅力であるかと考えるのは大きく違うが、改革を行うのであれば、学生を中心に据えて考える、学生中心に考えて作っていくことが大事だ。

### 【山岸会長】

金沢工業大学は色々なことが錯綜していて、現在のところ大成功を収めており、他の大学としては追いつける部分がないと思う。小林委員の言うような本当のところはどうかという点は実はよくわからない。

### 別紙3 高校との関係を強化する

#### 【事務局】

石川県と熊本県の取組について説明。

#### 【山岸会長】

高大接続というのはたいへんな話である。高等学校教育は大学のために大変なことになっている。高校で理科と文科に分けて教育しているというのは大学にとっては都合が悪い。しかし、高校側は大学入試がそういう風に分けて教育しないとおらないためにやっていることだ。新潟県からでもそういう対立を解くことができるのかどうか。

#### 【大竹委員】

県内で行われている高大接続事業をまとめる組織、窓口のようなものがあると高校が動きやすいかと思う。このあたりを有識者検討会議で模索することができればと考えている。

高等学校にとって不都合な改革が行われているような印象はある。私たちは高校生の学力を高めたいと考えるが、大学は学力を問わない入試制度をどんどん取り入れており、生徒はそちらになびいていくので、非常に困ったなという感じはある。

## 別紙4 中間的なとりまとめ(素案)「1 会議の目的」について(資料3)

### 【西井委員】

最初の問題に戻るが、ここでの議論が新潟県内における国公私立大学の魅力をどうあげるのかというものである。そのためには学生にとっても高校生にとっても地域にとっても、いい大学に行かせたなと思う大学づくりが必要だ。地元の大学の魅力をあげて、そこに入学した学生をどのようにして地元役に役立つ人材として送り出すかという点に議論は収斂される。

都会の大学に進学した場合と比べて地元の大学に進学した場合の魅力を考えると、都会にいった子供は就職で新潟県に戻ってくることは少ないが、仮に戻ってくれば都会の大学で培ったネットワーク、情報を持って帰ってくる。地元で学んだ場合は、地元の人間のネットワークをつくるということができ、それが地元の大学に進学する一番重要なことであると思う。

地元の高等教育あるいは新潟県の知的レベルを維持する人材もしくは新潟県を担う人材をどう育成するかという視点で協力体制をとるということは大切であると思う。

### 【山岸会長】

地元の中心的な人材として活躍をする、そのためのネットワークを作る、教育をするというのは重要なことだと思う。そこで、どのように個別の大学が対応すべきなのかということを考えると、これは振り出しに戻る。

新潟県にある大学だから、新潟県内にのみ目を向けるというのは無理な話である。大学として考える場合はそれぞれやり方があるわけだから、あまり特定のことに縛りつけようとするのは考えものであるので、そのあたりは議論をしないとわかりにくい状態になる。

### 【大竹委員】

「会議の目的(素案)」の「会議の前提としての課題認識」の記載内容に、「また、一方で、進学や就職に伴う若者の県外流出の増加は地域社会の活性化にとって大きなマイナス」というものがある。このような記載を見ると、高校生はびっくりするのではないか。高校で県外に出てはいけないという指導はしていないし、この部分がなくてもその後続く記載につながるのであれば削った方がいいと思う。

### 【山岸会長】

大竹委員がおっしゃるのは、県外に進学することと県内に進学することとを同等の価値で説明しないと困るということであると思う。この点をもう少し考えることによって、県内の大学に進学する県内の高校生に地元での定着・学習、そういったようなことの重要性をある程度わからせながら、一方で、両方の必要性というか、輝ける努力というものライトアップさせて課題認識とした方がいいと思うので、その点を次回までに検討しなければいけないと思う。

## 別紙5 中間的なとりまとめ(素案)「2 現状認識」と「3 取組を進める上での『基本的な認識』と取組の「柱」(総論)」について

### 【大竹委員】

「現状認識」の記載内容に、「県内高校卒業生の県内・県外別進学比率をみると、過去10年以上、おおむね4：6の割合で大きな変化は見られない。」とある。私が先ほど指摘した点と矛盾が生じると思う。量的な流出はそれほど変わっていないが、質的な流出ということで県外流出を危惧されているのか。

### 【伊藤委員】

「現状認識」の中で「現状での大学の取組例」というものが紹介されているが、これは事務局側がHP等で調査をして、特色があると考えたものを掲載しているということなのか。どういう基準で選んだのか、選ばれる側としてははっきりさせていただく必要があると思う。

### 【事務局文書私学課込山】

紙面のボリュームの関係があるので検討する。

## 別紙6 中間的なとりまとめ(素案)「4 魅力アップ取組の『柱』(各論)」について

### 【船戸委員】

「個々の大学が取り組むべきこと」と「県内の大学がゆるやかに連携して取り組める可能性があること」と大きく二つにわけてもらわなければいけない。

学生の満足度と付加価値は前者に該当することだ。高大連携と地域貢献については後者に該当し、これがこの会議の趣旨に添うと思う。

社会的に認知されるような大学連合、コンソーシアムというものを作ってその中で取り組んでいくのが、もっとも具体的ではないか。その場合に、求められることは新潟県内の大学が本気で取り組む覚悟があるのか、ということだ。それを県の方で確認して欲しい。

### 【山岸会長】

学生の満足度調査には疑問を持っている。調査してランキングのように並べられるものではない。個々の大学がそれぞれどのように考えて大学を運営していくかという話だ。

県内の大学のゆるやかな連合という問題はやさしそうで難しいと思う。個別の大学がどういう風にするのかということを知らないとこの議論は定着するのが難しい。個々の大学が考えている事柄や全く相手にしない事柄といろいろあると思うが、それがわからない状態でテーマを決めるということは、実際問題としておかしなものになってしまうと思う。

F DやS Dというのは最近ようやく動き始めたという感じだ。個別の大学の問題といってしまうえばそれまでだが、日本の大学文化の中になかったことをやろうというのであるから、相互に刺激し合ったり、ノウハウをやりとりするような情報交換の場がなければいけないと思う。

### 【西井委員】

「課題整理のマトリックスイメージ」(行に「学生の満足度、卒業生の付加価値」、「高校との関係」、「地域貢献、地域からの評価」という項目、列に「個々の取組」、「連携した取組」という項目を並べ、各々について統一的に「具体的取組を整理(可能であれば短期、中長期的に分けて整理)」という表現を記載したもの)についてだが、誰に対して何を改善していくのかということと、誰を対象として発信するのか明確にする必要がある。

また、「サポート役の行政」についてであるが、地元で高等教育機関を維持するためには、行政のサポートが必要である。そこで、行政サイドを主語として何をサポートできるのかという発信が必要である。

いずれにせよ、主語を明確にしたマトリックスイメージが必要だ。

### 【伊藤委員】

大学側にはメッセージが伝わっていないというジレンマがある。ゆるやかな連携の中で、それを発信していただけるということであればより浸透していく機会としてありがたい。そういうものをパンフレットで発信するという点については、物足りなさを感じられる。舟戸委員のほうから新潟らしい教育、取り組みを発信してはどうかという話があった。地震をテーマとしてはどうかという提案があったが、その通りだと思う。新潟市から市内の大学に対して、どういうテーマであれば連携がとれるかという照会がある。ゆるやかな連携という問題に一步踏み込んで、テーマ的に連携をすすめるということが必要ではないかと思う。

### 【山岸会長】

F Dについては、国立は文科省が言い出したからやっているが、私立は本当にやっていないところが結構ある。国立の情報も私立に流れるかという流れない。ずいぶん状況が違うと私立を見ていると感じる。

### 【船戸委員】

F Dはかなりの部分が大学側の体質によるので、みんなで取り組むのが難しい。多くの大学に共通したテーマで何かする場合、そのときの講師としてふさわしい方がこの中のメンバーにいる。たとえば、西井委員に全国の大学の財務状況について学長を相手に話をしてもらおうというのは必要なことだ。グループとしてゆるやかな連携の中で取り組むというのが可能であると思う。私としては話合うだけではなく一步でも二歩でも、たとえ途中でいいから何かをやってみようという意欲が出てきてほしい。

## 別紙7 質疑応答

### 【A大学】

オープンキャンパスにきている県外からの学生が激減している。県内の高等学校の進路指導の先生方に県内の大学をみるような企画を文書私学課でしてもらえないだろうか。そのような事業がもし可能であればやっていただきたい。

### 【文書私学課長】

一つの意見として検討する。

### 【B大学】

私どもが一番困っていることは高校生の側からみた魅力というものがよくわからないということで、これを教えいただけると大変ありがたい。

また、事務局や委員の方々は新潟県内の実情について認識されていないところがあるのかなという印象がある。県内国公立大学の学長が集まる会合はあるし、地震のあと長岡では4つの高等教育機関と1つの研究機関でコンソーシアムを作っている。高大連携についても様々な取り組みが行われている。

### 【船戸委員】

基礎的なデータ、事実は承知している。ただ、例えば年に一回の会合で何をすることができるのか。それぞれの大学でそれぞれ取り組んでいることは事実であり、それをどのようにして一つの力にして社会に対してアピールするか、県としてもサポートしやすい形をつくる必要があると思う。

### 【B大学】

会合については激しく批判されているのが現状である。共通の話題が作れず、大学間の連携を何の目的のためにやるのかということをはっきりさせないと同じようなことが起こるということを先進事例として承知しておいてもらいたい。

### 【山岸会長】

船戸委員の方から学生、高校生の満足度は個々の大学で取り組むものであるというご意見があり、それがよくわからないから、こちらで調べてほしいということであるが、これは各大学が涙を流して自分で調べるしかない。コンサルティング会社に頼んでいるようなものはだめだ。自分たちで明日を生きる話である。人様に頼んでもだめだ。外からきた人間がどうこういえる話ではない。